

# 「こころ」を生成する「心臓」

## 序

『心』というテクストの△作品▽としての享受のされ方ほど、日本近代文学をめぐる思考と感性の制度を露わにしているものはない。高校の国語教科書や大学の一般教養向け教科書に、最も象徴的に現われているように、「上―先生と私」、「中―両親と私」、「下―先生と遺書」という本来対話的に構成されている『心』のテクストは、「下―先生と遺書」のみを他から切り離し、それだけを中心化し、△作者▽漱石の思想と倫理を解釈する対象として、△作品▽化されてきたのである。とりわけ『こころ』をめぐる批評と研究は、こうした一種の病いともいえる偏執性に貫かれており、今私の眼の前にある膨大な数の『こころ』論のほとんどは、「下」を中心として、「先生」の言説の背後に、△作者▽漱石の思想を解説しようとするものである。そしてある意味では官民一体となった形で、「道義」とエゴイズム、恋愛と友情、信と不信といった二項対立的な枠組が、「正しい」解説格子として設定され、その二項対立を止

揚するものとして「明治の精神への殉死」といった、欲望を禁忌の中におし込める、精神と倫理の優位性に裏打ちされた死の美学に、普遍的価値が与えられてきたのである。

もちろん批評や研究の中には、「上」「中」を軸に論じたものもある。しかしそれらとて、そこに「下」にむかう周到な伏線を確認するだけで、△作品▽の意味を決定する契機が「先生」の遺書にのみ見出されていることにはかわりはない。伏線という発想自体、初めのうちは「不得要領」のうちに伏せられていた謎が、最終的な謎解きに誘うという、線的な構造を前提としているのだ。こうした思考と感性の制度は、結果的には読者とテクストとのかかわりをも、直線的なものにたがはめする方向で機能している。それはまた「遺書」という「死」の言説を意味の中心に据えることで、人間の存在を、「死」の意味という不変の同一性へと回収してしまいうものでもある。従来の『こころ』の論者は、日本浪漫派から「進歩的」知識人まで、方法や観点の違いはあれ、結局は何らかの形で、「先生」の死を美化せずにはいられなかったのである。かくして『こころ』という

小 森 陽 一

△作品▽は、「倫理」「精神」「死」といった父性的な絶対価値を中心化する、一つの国家的なイデオロギー装置として機能することになってしまったのであった。若い読者たちは、「先生」の「倫理的」「精神的な「死」の前に脆かされ、萎縮し、自己の倫理性と精神性の欠如を、神格化された△作者▽の前で反省させられてきたのだ。

私の意図は、国家の反動的なイデオロギー装置と化した「ころ」という△作品▽を打つことにある。そしてその根拠は、実は「心」のテキストそのものの中にあるのだ。「上」「中」「下」の三つの部分は重層的な円環を描く時間の中で、相互に対話的にかかわっている。直線的な時間軸になおせば、まず「下」で書かれる「先生」の過去が最初に位置し、その末尾近くから「上」で書かれる「私」と「先生」の出会いへとつながり、「中」の後半部が遺書を書く、「先生」の今と重なり、「中」の末尾から「私」が「遺書」を読む、今へと連なり、さらにそれから一定の年月が経過し、自らの手記の中に遺書を引用するという、「私」の書く時間へと繋るのである。そして、こうした重層的な円環を読者の読む「今」がさし貫くことになる。そのことはまた、過去の「先生」と「遺書」を書く時点で「先生」、「遺書」を読むまでの過去の「私」と手記を書いている、「私」、そして読者の私という、差異的な自己意識が、多層的円環的に組みあわされる構造でもあるのだ。そしてそれは、「私」と私の対話性の中で、常に開かれていく、生の円環でもある。

## 一

開くことでしか、再び△始まり▽にもどることでしか、読むとい

り行為―言葉と出会う今を即座に過去にしなから、その一つ一つの記憶を持続させながら、線をそして面を織りなしていく運動―を停止することができないテキストとして、私にとっての「心」は存在しているように思える。そして、読む行為を停止したのちも、私が出会って来た言葉の集積は、なお相互に反応しつづける運動を停止することはない。そのようなものとして、「心」を開く冒頭は、次のように書き出されていた。

私はその人を常に先生と呼んでいた。だから此所でもただ先生と書くだけで本名は打ち明けない。これは世間を憚る遠慮というよりも、その方が私にとって自然だからである。私はその人の記憶を呼び起すごとに、すぐ「先生」と云いたくなる。筆を執っても心持は同じ事である。余所々しい頭文字などはとても使う気にならない。  
(上―一 傍点引用者 以下同様)

このわずかな数行の表現は、その短かさにかかわらず、「下」における「先生」の遺書の表現構造全体を差異化するものとなっている。「先生」は最も核心的な告白を、「私はその友達の名を此所にKと呼んでおきます」(下―一九)と書きはじめていた。まさに「先生」は、自分の心に決定的な刻印を残した親友のことを、「K」という「余所々しい頭文字」を使って書き記したのであった。そしてそれ以後、遺書の冒頭にくるおしいまでにあらわれていた「私」への二人称的呼びかけは、消えていくことになる。そのような書き方、言葉の使い方そのものを、「私」は差異化する方向で自らの言葉を発し始めるのだ。その行為は暗黙のうちに、「先生」の「K」

に対するかかわり方(記憶)が、「余所々々」しいものであったことを示している。同時に、「私」と「先生」との間で造り出された関係(記憶)が、それとは全く異ったものであることを宣言しているのもある。

しかしまた、この表現からは、「先生」という存在に対する否定や批判の調子を感得することもできない。むしろそれは、「先生」という存在への、全面的な共感を印象づける働きをしている。そして「私」が言葉を発する身振りは、「先生」の行為を反復するものである。一方で「先生」という存在全体に共振し同調し、その生を反復しながら、他方「先生」が残した「遺書」の書き方(そこにおいて言葉化されている他者とかかわり方、他者をめぐる記憶<sup>II</sup>過去のあり方)に対しては徹底して差異化する。そうした一種シリーズ化したテキストの相互運動、シリーズ化した人格と言葉の相互運動が「こころ」という小説の基本的な特質である。

では自分が「筆をとって」「書く」という行為の過程で、記述される他者を、「先生」と「呼ぶ」ことと、「頭文字」で書きつけることとの間には、どのような異なりがあるのか。「呼ぶ」ことは呼びかける人格が、呼びかけられる人格を、言葉が生まれる場に現前させ、あたかも直接的な二人称としてかわろうとする運動にほかならない。呼ぶ者と、彼の言葉と、呼びかけられる相手の存在とは、同時に不可分の相補性のもとにあらわれてこなければならぬ。決して相手は、たとえ「その人」がすでに死に、過去の存在、今は不在の人であっても、この同時性と相補性は造り出されねばならないのだ。「その人」は過去と記憶の中に自己完結的に同一化されるのではなく、過去と記憶の集積点である今において、新たに生

きられる過程<sup>III</sup>なのだ。だからこそ、「その人の記憶を呼び起すことに、すぐ『先生』と云いたくなる」のであり、「その人」の存在は、決して今から切り離された過去に押し込められているのではなく、今—あなた—と共に在るとして二人称的なまじわりの中で、呼びかけ答えあう存在として共存し、新たなまじわりを生成しているのである。今書いている手記の読者には、本来「その人」という三人称としてしか伝達できないような他者の存在に対して、しかしそれでも自らの言葉の中で二人称的なまじわりを残存させ、持続させ、蘇甦させようとする。それが「先生」と呼びかけつつける中で、手記を記述しようとする「私」を貫いている運動にほかならない。

このような「私」の手記の書き方、つまりは「上—先生と私」「中—両親と私」における言葉の運動に対して、親友をKと「余所々々しい頭文字」で現わしてしまった「下—先生と遺書」の言葉は、他者の存在を對象化し、客体化する極限、つまりは文字通り他者を記号化し一義的な意味へ同一化してしまうような、三人称的なかわりを現わしたものとなる。今から限りなく切り離された過去の中に、他者の人格を固定してしまような言葉、そして他者に対してそうすることによって、自分自身をも全く同じように對象化、客体化してしまような言葉が「先生」の遺書を買っている。このような言葉のあり方に潜在的な、だからこそまた全体的な異和を表明し、それを差異化しつづけることを宣言しているのが、「心」が開かれる冒頭の表現なのだ。このたった一つの事実からも、「下」だけを切り離して高校生や学生に読ませること、「下」だけを分析の対象として一義的に解釈しようとすることは、「心」というテキストの生命の線を切断することであり、そうした論者たちが崇める

「先生」を限りなく裏切りつつけることにはかならない。なぜなら「先生」は自らの遺書の言葉を、「私」という自分とは限りなく差異的でありながら、同時に自分の生を受け継ぐような存在に託したのであり、その言葉は「私」の「こころ」の中でそれ自身の意味からずらされ、新しい意味を生成するものとして流れつつけるのであり、決して一義的な意味を凝固させようとする者を読者として選んではないからだ。

「先生」の遺書の書き方に対峙するような「私」の態度表明は、その後「上」の中でくり返し変奏されることになる。たとえばKの墓参に同伴しようとした「私」は、「先生」の眼の「異様の光」、「迷惑とも嫌悪とも畏怖とも片付けられない微かな不安らしいもの」(上―六)によって固く拒まれてしまう。

然し私は先生を研究する気でその宅へ出入りをするのではなかった。私はただそのままにして打過ぎた。今考えるとその時の私の態度は、私の生活のうちで寧ろ尊むべきものの一つであった。私は全くそのために先生と人間らしい温かい交際が出来たのだと思う。もし私の好奇心が幾分でも先生の心に向って、研究的に働らき掛けたなら、二人の間を繋ぐ同情の糸は、何の容赦もなくその時ふつりと切れてしまつたらう。若い私は全く自分の態度を自覚していなかった。それだから尊いのかも知れないが、もし間違えて裏へ出たとしたら、どんな結果が二人の仲に落ちて来たらう。私は想像してもぞつとする。先生はそれでなくても、冷たい眼で研究されるのを絶えず恐れていたのである。

(上―七)

決して相手を「冷たい眼」で「研究」するようなかかわり方をしないこと、それが「先生」との「人間らしい温かい交際」を支える「私」の姿勢であった。しかもそれが「自覚」されていない「私」の自然なあり方であったからこそ、「尊むべきもの」だったのである。人の「心に向って、研究的に働らき掛け」るようなかかわり方とは、とりもなおさず人の「こころ」を、観察と分析によって対象化、客体化すること、いわば事物と等しいモノとしてとりあつかうことだ。そのとき他者は、主体に対する客体として引き離され、単なる観察され、分析される、実験材料のごとく、限りなく私の「こころ」から遠ざけられてしまう。そのようなかかわり方を、明確に拒否したところに、「私」と「先生」を「繋ぐ同情の糸」が結ばれ、そして切れなかつた最大の理由があるのだ。

そして実は、他者を「冷たい眼」で観察し、「研究的」にしかかかわることのできなかつた人間の告白が、「先生」の遺書だったのである。自分の両親の死から、その告白を始めた「先生」は、父の後を追うような母の死に言及しながら、その臨終の床にある母に対してでさえ、「物を解きほどこいて見たり、又ぐるぐる廻して眺めたりする癖」を捨てられず、その「性分が倫理的に個人の行為やら動作の上に及んで」「他の徳義心を疑うようになった」(下―三)ことを強調する。父母の死、そして叔父の財産問題をめぐる「胡魔化し」(下―九)を通して、「先生」は「子供らしい」「心の眼」(下―五)を失い、人の表と裏を分離し、徳義を疑う「猜疑の眼」(下―八)を持ってしまふのであった。しかもそのような「眼」の獲得が「世の中にある美くしいものの代表として」「女を見る事」、「盲目の眼が忽ち開く」(下―七)ことと同時にあつたことにも注

意しておかねばならない。「美しいもの」とは、あの「殆んど信仰に近い愛」を抱いていたお嬢さんにはかならない。「美しいもの」を見ようとすると「眼」が、そのまま「他の徳義心を疑う」「猜疑の眼」になってしまふような二重構造、「信」と「不信」による世界の二分法を、「先生」の眼はくりくり込んでしまったのである。

このような二分法は、とりもなおさず他者の言葉、表情や態度の原因として、常に「人間らしい」「信用」と、「利害問題」をめぐる「策略」の矛盾を分節化し、そのどちらが「真実」であるかを二者択一しなければならぬという、因果論のどうどうめぐりを意識の中につくりだす。こうした意識は「奥さん」や「お嬢さん」との關係性においても、「先生」を「煩悶」におとしいる。自分に対する二人の態度の「背後」に「策略」を読みとらざるをえない「眼」は、自分自身を「絶対絶命のような行き詰った心持」におち入らせる。そして脱出口はない。何故なら、「信用」と「猜疑」は「何方も想像であり、又何方も真実であった」(下―十五)からである。二者択一を迫られながらも、どちらも選ぶことのできない二重拘束の状態、そしてたとえどちらかを選んだとしても、すぐまたそれが二分化されてしまふような二重拘束の閉じた円環連鎖をつくり出すのが、「冷たい眼」にはかならなかつた。他者に向けられた「冷たい眼」は、そのまま自分自身を引き裂くまなざしとして、かえってくるのである。

しかし誰よりも「先生」の「冷たい眼」に曝され、「研究」の対象とされたのはKであった。「お嬢さん」への恋を告白するKの表情は、「口元の肉」の微妙な「顫え」さえ見逃されずに「先生」の「眼」に捉えられ(下―四十)、再び「恋愛の淵に陥いた」自分

への批判を求めたKを、「先生」は「丁度他流試合でもする人のように」「注意して見ていた」のである。その時「先生」は、「私の眼、私の心、私の身体、すべて私という名の付くものを五分の隙間もないように用意」するという、自我意識の鎧で身を固めた、徹底して主我性に凝り固った存在と化していたのである。「先生」はKの心を「彼自身の手から、彼の保管している要塞の地図を受取って、彼の眼の前でゆっくりそれを眺める」ように、明瞭に把持していた。

しかし、そのことは決してKの「ころ」をよくわかつていたということではないのだ。そこには、Kの苦しく切ない思いを共有し、「苦しい」とだけ言った彼の身になり、同情するという、人の「ころ」をわかるうえで最低限必要な共感の姿勢が完全に欠落している。Kの心は、あたかも占領されるべき敵の「要塞」のように、冷たくつき離され、しかしそのぶんだけ明晰な見取図として対象化され、客体化されてしまっている。Kの発する言葉、彼があらわにする「表情」、まなざし、態度は、ただ「恋の行手を塞ぐ」ためにのみ解釈され、「一打で彼を倒す」ためにのみ必要な「研究」材料として、親友としてのKという全存在から切り離され、寸断されて、「先生」の「冷たい目」のレンズの前に置かれるのである。まさに二人の間に「びたりと立て切」られた「襖」に象徴されるように、そのような關係性のもとでは、他者に対する自分の心は、そしてまた明瞭に見えていたはずの相手の心も、「暗闇」(下―四十三)の中に閉ざされてしまうことになる。

「私」は自らの手記の書き方を通してこのような「先生」の反省的に記される過去に対してのみならず、その過去の書き方に対して

も差異を明確にしているのだ。「先生」はその遺書の中でなお、Kが発した「覚悟」の意味を、そしてまた彼の自殺の原因を、分析し解釈しようとすることを止めてはいない。「観察」を通して、当初は「失恋」のため、次に「現実と理想の衝突」のため、そしてついには「私」のように、たった一人で淋しくて仕方がなくなった結果、急に所決した」と疑い、「裸と」（下―五十三）するのである。こゝでも、Kに対して主我的存在としてしか、かかわることのできない「先生」の在り方が露呈している。自己の主観の枠組に他者をあてはめ、そこでの同一性を見出すことで、あたかも他者を理解したと思ってしまう態度をこそ、「私」は断じて拒否していたのであった。それは結局、自分の尻尾を自分で飲み込む蛇のごとく、自意識の閉じた円環の中で他者とかかわることではない。そうであればこそ「私」は、「先生」の死後に書かれている自らの手記の中で、決してその死を意味付けようとはしなかったのであり、二人称的なかわりそのものを再現することにもふみとどまっているのだ。そうすることによつてのみ「先生」との「想像してもぞつとする」ような関係、因果論の閉じた円環を回避し、「同情の糸」を「繫ぎつづける」ことができたのである。

## 二

「私」と「先生」との出会いにおいて、互いの「眼」で相手を見ることが、へ見る↓見られる√関係性は注意深く避けられていた。夏の光に満ちた鎌倉の海の群集の中で、「私」は「先生」を発見する。しかし、それだけでは二人は出会わないのである。台の板の下に落とし、眼鏡を拾う、身振りを前奏として、「先生」の近眼が強調

されるのは、Kに対するあの「嫉妬」を自覚した瞬間、晩秋の雨の日に「Kのすぐ後に」「御嬢さん」の姿を見たときであった（下―三十三）。「先生」と「私」は群衆から離れ、たった「二人」だけで「広い蒼い海の表面に」「仰向（あきむか）になったまま浪の上に寐（ね）るといふ姿勢で、ようやく言葉を交すのであった。決してまなざしまなざされるような姿勢ではなく、互いにその視線を「青空」に向けるように身を浪のゆらぎにまかせながら、二人は身体の共振を媒介として出会っているのだ。そして「ばたりと手足の運動を止め」た「先生」の身体が仮死の姿勢であるなら、それを「真似」した「私」の全く同じ反復された姿勢は、「強い太陽の光」に身をゆだねる「自由と歓喜に充ちた」生の姿勢にほかならない。

このように「先生」と出会った「私」は、相手を「観察」も「研究」もしない。ただ「直感」し「直覚」（上―六）するだけだ。そしてその「直感」と「直覚」は、思惟や意識が巡る「頭」で、あの「眼」と直結した「頭」で行われるのではない。熱い「血潮」が循環する「胸」で行われるのである。「私」が「失望」をくりかえしながらも、「先生」にひかれ、彼にむかって進んでいくのは、「胸」を流れる「若い血」が、「先生にだけ」は「素直に働」（上―四）いたからにはかならない。

思えば「先生」の遺書には、一種異様とも言える「血」へのこだわりがあり、彼の告白する過去は「血」のドラマでもあったのだ。「先生」は自らの過去を「私」に語り始めるにあたって、こう宣言していた。

私はその時心のうちで、始めて貴方を尊敬した。あなたが無遠慮

に私の腹の中から、或生きたものを捕まえようという決心を見せたからです。私の心臓を立ち割って、温かく流れる血潮を吸ろうとしたからです。その時私はまだ生きていた。死ぬのが厭であつた。それで他日を約して、あなたの要求を斥けてしまつた。私は今自分で自分の心臓を破つて、その血をあなたの顔に浴せかけようとしているのです。私の鼓動が停つた時、あなたの胸に新しい命が、宿る事が出来るなら満足です。(下―二)

この衝撃的な「血」をめぐる言葉は、これから語られる過去の最も核心的な部分、「頸動脈を切つて一息に死んでしまつた」(下―五十) Kの、「襖に迸(はな)びしつてゐる血潮」(下―四十)と呼応している。しかし「先生」が遺書を書く今、「私」に「浴せかけようとしている」「血潮」は、決してKの「頸節(けいせつ)から一度に迸(はな)びしつた」「血潮」のように、二人の間を隔てる「唐紙」の上で凝固したりはしない。その「血潮」は「先生」の「鼓動が停つた時」に、遺書を受けとつた「私」の「胸に新しい命」を「宿」らせるものとして流れつづけるのでなければならぬ。そしてこの「先生」の血の呼びかけに答えるかたちで、私は「血」のつながっている「本当の父」と「あかの他人」である「先生」を比較しながら、「肉のなかに先生の力が喰い込んでゐると云つても、血のなかに先生の命が流れてゐると云つても、その時の私には少しも誇張でないように思われた」(上―二十三)と述懐するのである。ここでも注意深く「先生」の影響が「何時か私の頭に影響を与えていた」と書いた直後に、「ただ頭というのはあまりに冷か過ぎるから、私は胸と云い直したい」と訂正されている。「私」の「先生」に対する「血」の共

有ともいえる身体的合一感は、この時「大きな真理」として感得されるが、病床にある父を見つめるなかでさらに思想的に深められ、油蟬の声を聞いていた頃「二人で一人を見詰めていた」「私」は、それが「つくつく法師の声になる」頃には「私を取り巻く人の運命が、大きな輪廻のうちに、そろそろ動いているように思」(中―八)うようになるのであつた。そして、最終的に臨終近い父を捨て、「先生」のもとへ否、たつた一人残された「奥さん」のもとへはしることなるのだ。

ここには、父親を捨てることに対し「不自然」さや非合理性を感じるような論者たちの、やわな家族的倫理観を越えた、新たな「血」の論理が獲得されているといえよう。記述される対象としての過去の「私」は、たしかに未熟で純真な青年だが、手記を記述する主体としての私は、すでに「先生」の思想的な枠組を脱し、新たな運動としての「生」を生き始めているのだ。「私」と「先生」との関係は、単なる「精神的親子」でもなければ、人格的「ミニチュア」でもない。むしろ、「私」が「先生」に近づき、重なり、単なる反復者ではなく、その生を差異化する者として、「先生」のもつていた限界を越えたところから、この手記は書き始められているのである。

「血」の論理、それは親子、兄弟、親族を繋ぎ、肉親としての人と人との身体的な連続性と同一性を、なかば先験的に保証するものとして疑われることはなかった。「血」が繋がっていれば大丈夫という、暗黙のしかも無前提にちかひ「信頼」関係が想定され、人間関係をめぐる「倫理」そのものが「血」の論理のもとに培われてきたのだ。それは前近代の社会においては、人間関係をめぐる「自然」化された制度として機能していたし、とりわけ日本においては「義

理」や「人情」を底辺とした人間関係をめぐる「道義」が、擬似的な親子関係をモデルとした「倫理」的網状組織として、国家から私的関係性までを包括していたといえよう。

『虞美人草』の甲野がこだわりつづけた「第一義」としての「自然」は、そのような伝統的な「道義」だったのである。しかし、明治以後の近代資本主義の論理は、先鋭化された「血」の論理に基づく「信頼」関係の幻想を根底からつき崩した。周囲の人間を自分にとっての有用性や使用価値から判断し、人格をモノ化し、人間関係を金銭に換算できる利害の関係に置き換えてしまう近代資本主義の論理は、「血」に支えられていた「信頼」関係の裏側に、「下卑た利害心に駆られた」「策略」（下―九）を露わにするのである。「先生」が語る叔父一家との訣別、人間不信の原体験となった、「血のつづいた親戚のものから欺むかれた」（上―三十）ことは、まさに近代において「血」の論理の幻想が崩壊したことの告示にはかならない。思えば『彼岸過迄』の須永のこだわりはそこに集中していたわけだし、敬太郎の探偵行為は「血縁」者との信頼関係の崩壊過程を、結果としては「報告」するものとなっていた。漱石の作品世界では、めずらしく完全な家族が登場する『行人』の一郎は、血縁者との一切の信頼関係を疑い、孤絶している。そして須永も一郎も「頭」の人であることを自認し、「胸」で人とかわることができない人間であったことが明記されている。また『それから』以後の作品世界では、必ず「血」の論理から生み出された「倫理」―世間の「道義」や「徳義」―と対立する、「あかの他人」同士の出会いが劇的展開を促していたのである。

「先生」と「K」は、同郷者であると同時に故郷遺棄者であっ

た。しかし、「先生」が「血」の論理に基づく信頼関係を裏切られた存在であるのに対し、「K」は「道」のために自らそれを裏切っていたのである。その意味では「K」の方が、より主体的に「自由と独立と己れとに充ちた現代」（上―十四）の論理を選びとっていたといえる。それはまた近代資本主義のもとでの都市生活者の論理でもある。そんな「K」とは異り、「先生」は、この新しい論理に「淋しさ」を感じていたのである。「K」とのかかわりの中で発生する「悲劇」の大きな要因が、この「血」の論理、つまりは「家族」の論理に対して訣別する、「先生」の中途半端性にあることはこれまで見逃されてきた。故郷を棄てた「先生」は、結局「奥さん」「お嬢さん」との間で擬似的な「家族」関係を構成しなければ生きていけないのであり、そのような関係性を前提にするからこそ「猶疑心」に悩まされるのである。そしてたった一人、孤絶の「運道」を歩もうとしている「K」に対し、経済的に親がわりをつとめようとし、結局は自らつくり出した擬似的家族の中に彼を引き込むことになるのである。

「先生」は「家族」の論理との訣別をし切れぬまま、「K」の孤独を奪ってしまったのである。それは一見「K」のためであるかのように装われながら、実は自らの孤独の「淋しさ」をいやすための手段にほかならなかつたのである。孤独の禁止、一人一人の人間が自らの時間と空間をもつことの禁止、それは近親相姦のタブーに匹敵する拘束力をもった、「家族」という組織のタブーなのだ。しかし人は、自己と他者、自己と世界との間に、真の意味での「繋り」がなく、「余所々々しい」疎隔しか存在しないことに気づき、そのことを徹底して自覚し、疎隔された状態に堪え、自分と共に存在す

るような他者との出会いへの希求を、切なる願いへとおしすすめる中で、はじめて脱—主我的自己を獲得し、他者との共感、他者—と共に在ることにむかって開かれていくのである。

「先生」が、「私が孤独の感に堪えなかつた自分の境遇を顧みると、親友の彼を、同じ孤独の境遇に置くのは、私に取って、忍びない事でした」(下—二十四)というように、「K」を擬似的な家族関係にひき入れたのは、「K」のためというよりは、むしろ自分自身のためであり、そうすることによって「先生」は「K」が自己自身と関係を結ぶ(孤独の自覚)時間と空間を侵犯し奪ったのであり、それはまた「K」が本来の意味で他者と出会うことを奪ってしまつたことになる。そして全く同じものを「先生」は自分からも奪うことになつてしまつたのだ。

しかし、「あかの他人」の「先生」と「胸」でかかわり、その死後も彼の「血」を自らの「胸」の中に「新しい命」として「宿」らせようとする「私」は、はつきりと人間の本質的な孤独を感得し、その中に身をおいている。東京を去る汽車の中で、「先生」と「奥さん」の間にかわされた「どっちが先へ死ぬだろう」という会話を思いおこしながら、「私」はこう考える。

然し何方が先へ死ぬと判断分つていたならば、先生はどうするだろう。奥さんはどうするだろう。先生も奥さんも、今のような態度でいるより外に仕方がないだろうと思つた。(死に近づきつつある父を国元に控えながら、この私がどうする事もできないように)。私は人間をはかないものに観じた。人間のどうする事も出来ない持つて生れた輕薄をはかないものに観じた。(上—三十六)

人は自分の死をたつた一人で死ぬしかない。たとえ愛しあつた者同士でも、親子であっても、他者の死を我々はどうすることもできない。人は一度生れてしまつた以上、自分のたつた一人の死を死ぬために生きていくのだ。そこに「人間のどうすることもできない持つて生れた輕薄」がある。そのような孤独の自覚をもとに、「私」は「油蟬の声」の中で「一人て一人を見詰め」「哀愁」を「心の底に沁み込」ませる。それは決して「孤独の感に堪えなかつた」「淋しさ」ではない。むしろ人間の「孤独」そのものを見つめ、そこに身をおこうとする姿勢である。そして「つくつく法師の声」の中で「私を取り巻く人の運命が、大きな輪廻」として「観じ」られたとき、「私」ははつきりと既存の「血」の論理と訣別したのである。たとえ本当に「血」が「繫」つてゐる父であっても、子はその死をどうすることもできない。一日あるいは一時間と死を遅延させることはできても、死そのものを回避することはできない。そのときには、「子として親の死ぬのを待っているような」(中—十四)ことになる。死にゆく者のそばに居ることは、自らを慰め、「血」の「倫理」を守ることであっても、たつた一人死んでゆく者を救うことにはならない。「先生」の「血」—それは遺書の言葉にはかならないのだが—を自分の「胸」の中に「新しい命」としてめぐらしている「私」が選ぶ道はたつた一つである。「世の中で頼りにする」たつた「一人」(下—五十四)の人を失つた「奥さん」のもとへ、「孤独」のただ中にある「奥さん」のもとへ、新たな生を共に「生きるために急ぐことしかない。そしてこのような「孤独」—人間の「持つて生れた輕薄」—についての自覚は、自己の同一性と中心性を保証する絶対的的他者(父性的存在)の死を待ち、その他者に自己を重ねて

いこうとする殉死の思想（家族の論理）を脱し、新たな生の論理を生み出すこともあるのだ。

### 三

再びくりかえすが、「私」は「血」の論理を否定したのでない。新たな「血」の「論理」と倫理を生きはじめてたのである。もし単なる「血」の論理、「血」の繋りの否定であるなら、その後にくるのは「血」にかわる精神的繋りの実現であるはずだ。しかしそのような精神と肉体を分離させる二分法、血と肉を疎外した「頭」に宿るような心「精神」の在り方を、「私」は決して選びはしない。「私」は「先生」の精神上の息子などでは断じてない。そのような議論こそ、「家族」の論理の欺瞞的美学によって、『心』の生命を断ち、静的な構図の中に固定してしまうものである。「私」が「先生」とのかかわりの場を、熱い血潮の流れる「胸」に設定するのは、とりもなおさず精神と肉体を分離し、信と不信を分離するような、「頭」による二分法という、「先生」自身が陥った「思想」の枠組を解体し脱け出し、限りなく差異的な「生」を生成しつづけるためなのだ。

そして何よりも決定的な精神と肉体の二分法は、「お嬢さん」に對する「先生」の「愛」の中にあられていた。それが「殆んど信仰に近い愛」であったことを、「先生」は次のように述懐していた。

私は御嬢さんの顔を見るたびに、自分が美しくなるような心持がしました。御嬢さんの事を考えると、気高い気分がすぐ自分に

乗り移って来るように思いました。もし愛という不可思議なものに両端があつて、その高い端には、神聖な感じが働いて、低い端には性欲が動いているとすれば、私の愛はたしかにその高い極点を捕まえたものです。私はもとより人間として肉を離れる事の出来ない身体でした。けれども御嬢さんを見る私の眼や、御嬢さんを考える私の心は、全く肉の臭を帯びていませんでした。（下―十四）

本来「肉を離れる事の出来ない」「人間として」の「身体」を持ちながら、「お嬢さん」への「愛」においては、徹底した上位と下位の二分法、「高い極点」の「神聖」さのみを選びとり、「低い端」の「性欲」を否定し「肉の臭い」を排除しようとする心身分離の二分法が「先生」の「心」を貫いている。自己の「ところ」を、上位と下位、神聖なものと罪を孕んだものに分節化することによって、実は自分の「美しく」さや「気高」さも見えてくるのである。本来「人間として」は分離できないある全体性をもった「ところ」と「愛」を、垂直の価値軸——直立したときの「頭」と「身体」の位置関係——で意味論的に分節化し、上位のものだけを運びとろうとする発想は、文字どおりあの「プラトニック・ラブ」に象徴される西欧的形而上学、真の「愛」といった真理や正しさへの同一性を求め、静止し永遠に同一的な不変の価値を求めようとする志向性にはかならない。「先生は何時も静であった」（上―一六）し、「純白」と「倫理的」「潔癖」性を求めつづけたのである。しかしそうすることは、全く同時に「純白」や「潔癖」さといった上位価値の下に、排除された身体としての「暗黒な一点」（下―五十二）や「恐ろしい影」（下―五十四）、「血の色」（下―五十六）を抱え込むこ

となるのである。そしてそれらは、「美くしいもの」の前では、周到に隠蔽されなければならない。

「道」を追求する「K」の「精神と肉体を切り離れたがる癖」(下―二十三)を批判した「先生」は、結局「愛」の追求において、「K」と同じように精神と肉体を分離させてしまったのであり、そこに残ったものは、肉体の暗闇によって脅かされつつける、「頭」としての「心」＝精神でしかない。その意味において、二人にとって「精神的に向上心のないものは、馬鹿だ」という一言は、致命的な言葉、自らの生存の価値を奪うだけの力を持ってしまったのである。この言葉は、まさに人間の本来的で根源的なあり方を希求し解釈しようとする、身体から分離された精神の悲劇を物語っている。それはある一つの真理といった中心的意味作用へむけて、欲望を禁止と欠如の枠に押し込み、その欲望の源である身体を抹殺しようとする衝動でもある。「明治の精神に殉死」(下―五十六)するという「先生」の「奥さん」への言葉は、彼の「愛」が最終的に行きつく帰結点でもあったのだ。どのような根拠、観点からであれ、このような「心」のあり方を「美くしいもの」とする思考や感性は、自らを帰属させ従属させうる同一性の意味作用に固執し、秩序と中心へ自己を回収させてしまう反動的な役割しか果たさない。それはあの非劇の出発点であった、古い「血」の論理、「家族」の論理の郷愁に身をゆだねることにしかならない。

精神であると同時に身体でもある、熱い血潮の流れる「胸」で「先生」とかかわっていた私は、「奥さん」とも「心臓」でかかわり始めていた。「奥さん」が「先生」をめぐる「疑いの塊り」を告白するとき、「私」は「私の頭脳に訴える代りに、私の心臓を動か

し始めた」(上―十九)と感じる。そして「奥さん」は、自分の夫のことを「私」と同じように「先生」と呼ぶようになるのである。それは「先生」の不在の時ばかりではない。「私」の卒業祝いの際も、一方で直接は「あなた」と呼びかけながらも、「私」に向かつて三人称化する場合には「先生」という呼称になっている。「私」の、夫に対するかかわり方を共有する形で、「奥さん」は夫への呼称を選んでいるのであり、その意味で「私」と「奥さん」は同等の位置にあるといえよう。しかも「奥さん」が、「先生」の同席する場で「私」に向かう瞬間は、きわめて暗示的な対話が行なわれているのである。その対話と、その時の「奥さん」の姿勢を、「先生」の死後ある一定の時間が経過した中で、手執執筆時の「私」が選択していることを考えあわせるなら、そこに一つの黙劇を見ることができよう。

「子供でもあると好いんですがね」と奥さんは私の方を向いて云った。私は「そうですな」と答えた。然し私の心には何の同情も起らなかった。子供を持った事のないその時の私は、子供をただ蒼蠅蒼蠅いもの様に考えていた。

「一人貰って遣ろうか」と先生が云った。「貰もらっ子じゃ、ねえあなた」と奥さんは又私の方を向いた。(上―八)

「然しもしおれの方が先へ行くとするね。そうしたら御前どうする」

「どうするって……」

奥さんは其所で口籠った。先生の死に対する想像的な悲哀が、ち

よっと奥さんの胸を襲ったらしかった。けれども再び顔をあげた時は、もう気分を更えていた。

「どうするって仕方がないわ、ねえあなた。老少不定っていう位だから」

奥さんはことさらに私の方を見て、笑談らしくうん云った。

(上—三十四)

「奥さん」の顔の向きが記述されていなければ「ねえあなた」という二人称呼びかけは、「先生」に向けられたものととれなくもない。しかし問題なのは、単に二人称呼びかけの両義性、つまり「先生」と「私」に対する「奥さん」の態度の等価性だけではない。この対話が「先生」の「奥さん」に対する「愛」において、排除された身体的領域、禁止と欠如の枠に囲い込まれた欲望（性欲と生欲）をめぐるものであり、その「先生」との一種対立的な対話についての解答というより同意が、「私」に向けられているということなのだ。しかも前半の引用における、手記執筆時の「私」の自己規定は、今の「私」に「貰ッ子」ではない子供がすでにいることを暗示している。

これ以上の解釈はしない。しかしこの黙劇が、「先生」の遺書を汽車の中で読み、この世の中にたった一人残された「奥さん」と出会ってから、今その遺書を自らの手記の中に引用しようとするまでの「私」が、生きてきた生の過程を示していることだけはまちがいない。古い「血」の論理Ⅱ「家族」の論理を捨て、「持って生れた軽薄」としての孤独を深々と自覚し、あかの他人と血と肉で繋るうとしていた「私」が、共に「先生」と呼びかけた人を失った「奥さ

ん」と、「頭」ではなく「心臓」でかかわっていた「奥さん」と出会ったとき、選ばれるべき「道」と「愛」は、「K」と「先生」のそれを徹底して差異化するものであったはずだ。否定でも止揚でもない私の「道」と「愛」は、「K」と「先生」の「白骨」を前にしながら、決してそれに脅かされることなく、それをとり込み、精神と肉体を分離させることなく、つきつめられた孤独のまま、「奥さん」と共に一生きることで選ばれたはずなのである。それは人が自己の選択によってその中に入ることができ、また選択によって脱け出すことのできるような、親と子であり、姉と弟であり、夫婦でもあり、同じ「先生」の弟子でもあるような関係、つまりそうした一切の家族的概念にはくくり込むことのできない、家族の領土の一員には決してなることのない、自由な人と人との組合せを生きたことなのである。

「私」の言葉は、まさにそのような生の過程を、読者の「心臓」に生成させ流しつづけるものとして、限りなく「先生」の遺書の言葉を差異化しつづけるのである。そのことこそが他人の「血」（言葉）を自らの生として宿し、体内を循環させる「心臓」の論理なのだ。それはどうどうめぐりの同一的「循環」ではなく、生をうながす螺旋状の流れであり渦巻きなのである。凝固した血を襖（心の境界）に残した「K」の死体を前に、自分の部屋（心）の中を「ぐるぐる廻ら」ざるをえなかった（下—四十九）、死の影に脅かされつづける「先生」の自意識の閉じた円環を、「私」は自己の「心臓」を循環する血（言葉）を通して、一刻一刻と生を更新しつづける、開かれた生成の円環へと解き放ったのである。